

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 354



2001 MAY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成13年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成13年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、添付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月12日までに必着するようお願いいたします。

3. 議事

- (1) 議案第1号 平成12年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成12年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成13年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成13年度収支予算について

4. その他

記

1. 日時 平成13年5月19日(土)午後1時～2時
2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぼヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋(出口A2)
から徒歩2分

表紙写真

ロインで食糧を買い込んでから出発する。時々GPSで現在位置を確認しながら先へ進んだ。2700m程の峠を越えると、はるか前方に雪峰が望まれた。名前はわからないが、国境稜線に聳える、標高約5200mのピークであると思われる。立地条件からして、おそらくは未踏峰であろう。

(文・写真：大津広策)

ヒマラヤ No.354

-
- | | |
|-----------------------------|--------------|
| 1. アルナチャル深部へ | 東京農業大学農友会探検部 |
| 10. ミレニアム・ミート(2001.2/3~4)開催 | 尾形好雄 |
| 13. ヒマラヤ・ニュース<地域ニューストピックス> | |
| 14. 八千メートル峰登頂者生年月日別リスト | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |
-

アルナチャル深部へ

—— ディバン川探検廻行隊偵察報告 ——

東京農業大学農友会探検部

はじめに

我々は、2000年の春から東ヒマラヤの懐、アルナチャル・プラディシュ（Arunachal-Pradesh）北東部、未踏のディバン（Dibang）川上流部での沢登りを考え行動してきた。しかし、日本では殆ど情報が集まらない為、4月に隊員2名がインドで情報収集と、渉外を目的とした視察を行った。そこで、デリー（Delhi）にあるアルナチャル州政府の事務所（Resident Commissioner, Arunachal Bhawan）にてアルナチャル・プラディシュの州大臣であり、チベット仏教の活仏でもあるT.G.リンポチュ（T.G.Rinpoche）に会う事ができた。そして、古くからチベットとの路として使われていたであろうディバン川上流部での沢登り計画を話すと、全面的な協力を約束してもらうことができ、遠く手の届かない存在であった東ヒマラヤでの沢登りが、具体化してきた。そしてついに、経験不足、準備不足、情報不足を心配しながらも、9月7日に日本を出発した。

出発してからも、遅々として物事が進まないインドの雰囲気、苛立ちおぼえる事もあったが、日本を出発して25日目に、ようやく目的のエムラ川と呼ばれる、ディバン川上流部の支流の分岐点に立つ事ができた。そこから8日間、川沿いの路が無くなる最奥の村まで、そこに住む村人と生活を共にしながら、エムラ（Embla）川を偵察してきた。

率直な感想として、アルナチャル・プラディシュのディバン川上流部は、広く残っている未探検地域と、スケールの大きさから、私達が目指す探検廻行の価値と魅力は十分にあると思う。そして、この探検廻行計画はまだ何も完成していない。その先には未知がある。

今回は、お世話になった州大臣の招待で訪れたアルナチャル北西部と、本来我々が目指していた北東部の2章に分けて報告する。隊員は、隊長石井邦彦、副隊長大津広策、風間信行、国岡陽太の現役部員4名である。

I、アルナチャル北西部

■概要

当初の計画では、我々はアルナチャル・プラディシュ州（以下アルナチャルと略記）北東部に位置する。ディバン・バリー（Dibang Valley）地区にて偵察を行う予定であったが、日本を出発する一ヶ月前に、州大臣のT.G.リンポチュ氏（以下州大臣と呼称）から招待の申し出があり、彼の、アメリカで開催された国際平和会議からの帰国に同行するという形で、アルナチャル北西部のウェスト・カメン（West Kameng）地区とタワン（Tawan）地区を9日間旅行することになった。

この地域は、非常に仏教色が濃く、インドの中のチベットといった感じである。実際タワン地区周辺は、1914年のシムラ会談でインドに割譲されるまでは、チベットの領土であった。人々の間でも、チベットへの憧れが強いようだ。この地域に住む民族は、チベット・ビルマ語族であるモンパ



▼州大臣T.G.リンポチェ



(Monpa) 族が多数を占めており、住民の殆どが敬虔な仏教徒である。

標高は北に向かうにつれて上がり、国境付近には4,000m級の山々が連なっている。アルナチャルは、中国との国境問題が未だ解決しておらず、入域には特別な許可が必要だが、取得するのは非常に困難である。日本人では、本誌318号にも記載されている通り、1998年の1月には沖允人氏等がこの地域を訪れている。今回我々は、タワンの町までは沖氏一行と同じルートをとどり、そこから更に北西へ向かった。そして、本来外国人は国境から50km以内への立ち入りが禁止されているにもかかわらず、州大臣の厚意により、国境まで僅か12kmに位置するジミタン (Zimitang) 村を訪れることができた。

■アッサムからアルナチャル へ

我々は9月7日に日本を出発し、デリーにて通訳の Sawanobori Travel の K.イザキ (Izaki) 氏と合流後、電車でアッサム州の州都グワッティー (Gwahati) へ向かった。車内で二泊し、グワッティーについた。ここでインド政府旅行事務所 (Gov.of India Tourist Office) 副主任のサンジェイ・K・ダス (Sanjay K.Das) 氏とアルナチャルへの入域許可等の打ち合わせをした。グワッティーで一泊し、翌日テズプールへ移動し、州大臣一行と合流した。

そして9月11日、いよいよアルナチャルへの旅が始まった。州大臣は、自分の付き人や拳銃を持った護衛の他、デリーから招いた高僧の一行を連れており、我々も含めてジープ3台の大所帯となった。車のナンバープレートには「VIP」と記さ

れている。

アルナチャルに入り、玄関口ともいえるバルプン (Bhalukpong) 村に着くと、村の入り口には護摩が焚かれ、「ようこそリンポチェ」と書かれたアーチが設置されていた。そしてまるでマラソンの応援のように道の両脇に人々が並んでいる。州大臣は、大臣という地位よりも、チベット仏教のリンポチェ (活仏) というこで、人々から多大な尊敬を集めている。

ここで一同車を降り、州大臣を先頭に人々の間を行進した。州大臣は人々が差し出す絹のスカーフを差し出した人の首に掛けてやったり、人々のおでこを触ったりして祝福を与えながら、前へ進んでいった。我々は人々の熱狂ぶりに圧倒されながら、恐る恐る後をついていった。その後も幾つか村を通過したが、いずれも同様の歓迎ぶりであった。

バルプンで一休みして、再び川沿いを北へ向かう。このあたりはまだ標高も低く、気候も亜熱帯で、屋久島のような雰囲気であったが、1700m位の峠を越えると、景色は一変した。木が少なくて肌寒く、どことなく寂しい感じで、人々の着ている服もチベット風の長袖のものになった。途中、50m位の大きな滝を幾つも見かけた。更に標高を上げながら北上し、本日の目的地であるボンディラ (Bondila) の町へ着いた。標高は2,500mである。

■ボンディラの祭

州大臣歓迎のセレモニーが盛大に始まった。一行は楽隊に先導されて、大きなゴンパ (チベット仏教の寺院) へ入って行く。我々も「GUEST」と書かれたバッジを付けて、後に続いた。

ゴンパの中に入ると、読経が始まった。州大臣と、100人程の弟子達の念仏と楽器の音が院内に



響き渡った。州大臣はこのゴンパの住職でもある。読経が終わると、州大臣の演説があった。演説の後、人々は一列に並んで州大臣の祝福を受けた。我々も列に混じった。

昼食の後も、セレモニーは続いた。今度はゴンパの前にあるグラウンドのような広場で、子供や若者達が歌ったり踊ったりした。ボンディアラに着いてから5時間程で、その日のセレモニーが終わった。これで終わりかと思ったら、次の日は州大臣によるイニシエーション（説教）の式があった。僧侶達による、シャナクという悪霊を払う踊りや、鹿や獅子等のお面を被った僧侶達の踊りの後、州大臣の説教が始まった。念仏と演説が交互に繰り返される。彼が現地語であるモンパ語で演説をしたので、我々には全く内容がわからなかったが、彼の話を聞きに町中の人々があつまっていた。中には手を合わせて涙を流しながら聞いている老人もいた。後で聞いてみたところ、今回の説教のテーマは世界平和だったようだ。説教が終わると、州大臣から祝福を受けようと町中の人々が押し寄せていった。

昼食後、学校を見学した。60人程の生徒のうち、20人が両親がいないということであった。宿舎に行くと、初めはきちんと整列して静まり返っていたが、我々がカメラを向けたりしていると徐々に緊張が解け、大騒ぎになった。しばらく写真を撮ったり英語で話をしたりして賑やかな時を過ごし、最後は我々が教えた「アリガトー」の大合唱を聞きながら、ホテルへ戻った。

■タワン へ

翌日、出発前に州大臣からスポンサーシップ（寄付）についての説明を受けた。宗教、教育、医療など7つの分野について細かく金額が設定されていた。

ボンディアラを出発して、寺院の見学等をしながら、タワンへ向かう。急斜面をくねくねと蛇行しながら一気に高度を上げ、標高4,136mのセ・ラ（Sa la）峠を越える。途中いくつもの軍のキャンプを通過する。思ったより道がしっかりしているのはやはり軍事的な理由からだろうか。上部は雲の中で、どこか城塞のような雰囲気を漂わせた無毛地帯だった。初めて体験する高度で、3,000m

▼ボンディアラの学校の子供たち



位から耳や頭などに違和感を感じ始めたが、大事には至らなくてほっとした。最上部には大きな氷河湖と、さびれた寺院があった。

峠を越え、一気に高度を下げて、標高2,050mのジャン（Jang）村にて歓迎の宴に参加し、モンパ族の踊りを見せてもらった。民族衣装を着た女の子が足首に鈴をつけて、歌いながらかわいらしくステップを踏む。

この辺りでは有名なジャン・タワン滝という100m位の巨大な滝を見学してから、また別の村で同じような歓迎を受けた後、タワンへ到着した。標高はおよそ3,000mである。道が整備されているとはいえ、あれだけ険しい峠を越えているというのに、タワンは電気や電話もあり、都会的な雰囲気を感じさせていたが、やはり国境が近くなってきたせいか、軍人が多く、なんだか暗い感じがした。ここでも州大臣が演説を行ったが、マイクも無い小規模なものだった。

■ジミタン へ

翌日、タワンにある大きなゴンパを見学した後、州大臣達と共に、深い渓谷に沿って更に北西へ向かった。ここから先は、1925年にイギリス人の植物学者F.キングドン・ウォード（F.Kingdon Ward）がチベットからアッサムへ帰還する際に通過して以来、外国人が訪れたという記録はない。谷は急峻で、ニャムジャン（Nyamjang）川沿いの道を進んでいると、あちこちで支流が大きな滝になって本流に注いでいるのが見えた。ゴルサム（Gorsam）村では、巨大なチョルテン（仏塔）を見学した。チベットとネパールに同じものが一

▼ジミタン村遠景



つつつあるそうだ。仏塔のすぐ側に、1959年にドライ・ラマ14世がチベットから亡命してきた際、アルナチャルに入域して最初に宿泊したという小屋があった。途中、ルムラ (Lumla) で一泊し、アルナチャルで最も北西に位置する、ジミタン村に着いた。州大臣は演説をした後、その日のうちにルムラへ引き返すということで、ここからは別行動をとる事になり、我々は政府の宿泊所 (Inspection Bungalow) に泊まった。

■パンチェンバ族

ジミタン村周辺は谷が開けており、この辺りでは珍しく川辺には平地があり、畑作や放牧が行われていた。ここから川に沿って更に12kmほど北西へ進めば、中国との国境があるそうだ。

翌日、当初の予定では北東のBUM・ラ (Bum La) 峠にある、ドライラマ14世が一時滞在していたというティー・ゴンパ (T Gonpa) を訪れた後、そのままタワンへ抜ける予定だったが、BUM・ラへの道が落石で塞がれており、しばらく頑張ってみたが突破できなかったため、一旦ジミタン村へ戻った。

結局BUM・ラへ行くのは諦め、元来た道を引き返す事になったので、浮いた時間を利用して、この辺りに住むパンチェンパ (Pangchenpa) という民族の村を訪れる事にした。彼らはこの地域にのみ分布しており、独自の言語や文化を持っている。村へは車で向かったが、こちらもすぐに落石で道が塞がれていたため、歩いて村へ向かった。

車を降りて10分程歩くと、彼らの住むムチョン (Muchon) 村に着いた。以前ガイド等から、「パンチェンバ族は目から毒を出す」、「彼らが触った

ものは毒物になる」など物騒な話を聞いていたが、実際に会ってみると、見かけもモンパ族と変わらず、村には仏教が浸透している様だった。村の村長の家で、通訳を介して村の老人達から、パンチェンバ族の起源や歴史等について話を聞いた。彼らは、遥か昔からこの地域で、独自の社会を形成していたという。意外にもインド政府に対しては好意的で、1954年にインドの統治下になってからは、物資の配給などもあり、とても豊かになり、今は特に困っている事はないと言っていた。他にも、冬になると巨大な足跡を残すという、グロッパという野人が雪男の様なもの話を聞かせてくれた。以前村の男がグロッパを倒し、その手首が保管されていたが、以前ネパールから出稼ぎに来た男に、お金が無かったので仕方なく売ってしまったそうだ。ヒマラヤのイエティ等とのつながりを考えると、なかなか興味深い話である。

一時間程話を聞いて、村長が一人で建てたという立派な3階建ての仏教のお堂を見学した後、宿泊所に戻り、その日の内に、元来た道を通ってタワンへ戻った。

■再びボンディラへ

翌日、タワンからティー・ゴンパへ行こうとしたが、出発してすぐに軍のチェックポストで止められ、軍部の許可を得るために、あちこち飛び回ってみたがうまくいかず、結局断念することになった。以前西洋人の旅行者が、無許可でタワンから奥地へ侵入して捕まってから、取締りが厳しくなったそうだ。この日はみやげ物などを物色し、次の日、再びセラ峠を越えてボンディラへ戻った。

■アッサムへ戻る

アルナチャルに入域して9日目、チベット難民の村テンジンガン (TenzinGang) を訪れた後、アッサムへ戻る事になった。5時間くらいドライブをして、テンジンガンに着いた。ここも外国人の入域はかなり制限されており、我々が初の海外からの来訪者になった。

ゴンパは1974年に建てられ、現在375人のラマ僧がいるそうだ。ゴンパの側には絨毯の工房があった。市場の相場より遥かに安価で購入することができた。

午後4時ごろにテンジンガンを出発したが、故

障したトラックで道が塞がれていたりして、テズプールに着いたときには夜の12時になっていた。

久し振りのアッサムはやはり蒸し暑く、湿気のせい色々な物の匂いがはっきりと感じられ、とても新鮮な感じがした。翌日グワッティーまで戻り、我々の本来の目的地であるアルナチャル北西部へ向けて、しばらく休息をとる事にした。

II、アルナチャル北東部

■再出発と受難

我々東農大探検部員4名は9月7日に日本を出発し、9月11日から20日までの9日間、アルナチャル・プラディッシュ州北西部を訪れた。その後、アッサム州のグワッティーで、休養、準備、手続き等を行い、9月29日、アルナチャル北東部ディバンバリー地区を訪れるべく、グワッティーを出発した。インド国産タタ (TATA) 社のジープに、日本から郵送した登攀装備や食料等を満載し、広大なアッサム平原を、ブラマプトラ (Brahmaputra) 川の左岸に沿ってひたすら東へ向かい、一日目はジョルハット (Jorhat) の町で宿泊した。

翌朝、すがすがしい晴天の下で車を走らせていると、出発して一時間も経たないうちに、突然車のスプリングが故障し、時速15km程度で走ることを余儀なくされた。車のスピードが落ちて車内に風が入ってこなくなると、晴天が炎天下に変わった。車内は蒸し風呂のようである。二時間ほどのろろろ走って、ようやくシブサガル (Sibsagar) の町に着き、車を修理に出した。我々は朝食を採ってから3時間、日陰でひたすら修理が終わるのを待った。とにかく蒸し暑い。この時気温は34℃、湿度は78%であった。遂に修理が終わり、勇んで出発すると、一時間後、再び車が止まった。運転手はガソリン切れだと言う。シブサガルを出てから何度もガソリンスタンドの前を通ったというのに。場所は、アッサムティーの茶畑の真ん中である。運転手はのんびりと歩いてガソリンを買いに行く。日本とは時間の流れる早さが違うことを体感した。一時間後、再び出発する。

やがて、ディブルガル (Dibrugarh) の町に到着した。ここは空港が有り、この辺りではかなり発達した町である。クーラーの効いた食堂でビールを飲み、気を取り直して更に北東へ進んだ。や

▼ロインの町



がて日も暮れ、午後8時に、ブラマプトラ川の支流であるロヒト (Lohit) 川の辺にある、サイコハガット (SaikhoaGhat) に到着した。

■川を渡る

ここからアルナチャルへ行くには、広大なロヒト川をフェリーで渡らなければならない。フェリーといっても全長10m位で、甲板と操縦室しかない貨物船のような物だ。二枚の木板を舁にして、甲板に車を乗り入れる様は、まるでサーカスの綱渡りの様だった。やがて、甲板に車2台と10名ほどの乗客を乗せ、船外機と竹竿の力でフェリーが出航した。

ここから20kmほど下流で、ブラマプトラ川が3つに分かれている。ロヒト川と、上流でツァンポー (Tsangpo) と名を変え、有名な大屈曲部を有するディハン (Dihang) 川、そして我々が目指すディバン川である。

この辺りでのロヒト川の川幅は、およそ200mである。今は雨が少ない時期なので、浅瀬や中州がいたるところにあり、それを縫うようにしてフェリーは進み、上流に向かいながら徐々に対岸へ近づいて行く。右手にはアッサム平原が、そして左手にはアルナチャルの山々がそびえており、対照的である。霧のかかった山並みを眺めながら、暫し感慨に耽った。

一時間程して、対岸の船着場が見えてきた。浅瀬をフェリーがゆっくりと進んで行く。いよいよ上陸だ。

■ロインへ

船着場には、食堂や売店が長屋状に連なっており、乗客や船員達で賑わっていた。食堂で朝食を

▼ミシュミ族の老人



とり、車で北へ向かうと、アルナチャルのチェックゲートがあった。この辺りはサディヤ (Sadiya) という町で、かつてイギリス人の探検家たちが、東ヒマラヤを探検する際の拠点としていた場所である。ガイドのイサギ氏が書類を見せながら対応し、40分後、無事にゲートをくぐり、アルナチャルのディバンバリー地区に入ることができた。

ロヒト川を渡ってから、高床式住居や、日本人に似た顔立ちの住民が増えてきた。彼等は、アルナチャル東部に多く住む、ミシュミ族である。それから、道端で牛をあまり見かけなくなり、代わりに豚を多く見かけるようになった。牛を神聖視し、豚を汚らわしいものとするヒンドゥー教の影響が小さくなってきたことを象徴している様だ。

やがて、ロイン (Roing) の町に着いた。この町は、アッサム平原と、アルナチャルの殆どを占める山地との境目に位置している。商店や市場などもあり、比較的発達している。電話が利用できるのもここまでである。警察署に行き、ここから先への入域許可や道路事情などについて話を聞いた。われわれが目指している川を地図で示すと、その地図は間違っていると言い、そこには道など無く、蛭が沢山いるからやめたほうが良いと言い、正確な地図を書いてくれた。

■フンリ へ

市場で食糧を買い込んでから出発すると、すぐに急な山道になった。案の定、道は持参した地図とは違った方向へ向かっていたため、時々GPSで現在位置を確認しながら先へ進んだ。2700m程の峠を越えると、はるか前方に雪峰が望まれた。名前はわからないが、国境稜線に聳える、標高約5200mのピークであると思われる。立地条件からして、おそらくは未踏峰であろう。

この日は、フンリ (Hunli) という村の、政府の宿泊所に泊まった。ここでは自家発電をしており、電気がつくのは午後6時半から9時半までということであった。ロインで聞いた話では、こまでは過去に旅行者が来たことがあるという。

我々は、アメリカ製の航空地形図 (TPS、ONC) と、ロシア製10万分の1地図、あと現地ですり入れた地図をいくつか持っていたが、どれを見ても、今我々がいる場所に道は通じておらず、またフンリという村の名前もどこにも見当たらなかった。ここから先は、我々外来者にとっては、未知の領域であった。

■イタリン へ

フンリを出てしばらくすると、舗装されていた道路が砂利道に変わった。時々道路工事をしている人々を見かけるようになった。道は川沿いに、川から50~100mくらい上についており、支流にぶつかるたびに、その上流へ大きくまわりこまなければならなかった。フンリからディバン川の支流に沿って進み、やがて本流に合流した。

ほとんど大型のダンプしか通らないためか、轍が深く、ある時、切り立った断崖を通過している途中で、我々のジープがスタックしてしまった。後輪が両方とも完全に宙に浮いている。色々やってみたがなかなか脱出できず、途方にくれていたところ、運良く通りかかったダンプに連結して引っ張り出してもらうことができた。危なく道端で野宿をしなければならなくなる場所であった。

やがて、川辺にあるイタリン (Etalin) という村に着いた。ここで話を聞くと、この辺りではディバン川はタロ (Taloh) 川と名前を変えており、我々が目指しているのはそのタロ川の支流の、エムラ川だということがわかった。エムラ川へは、車で行くことはできないという。我々はここで宿

をとり、装備や食料の確認をして、明日の出発に備えた。

■ディバン川探検史

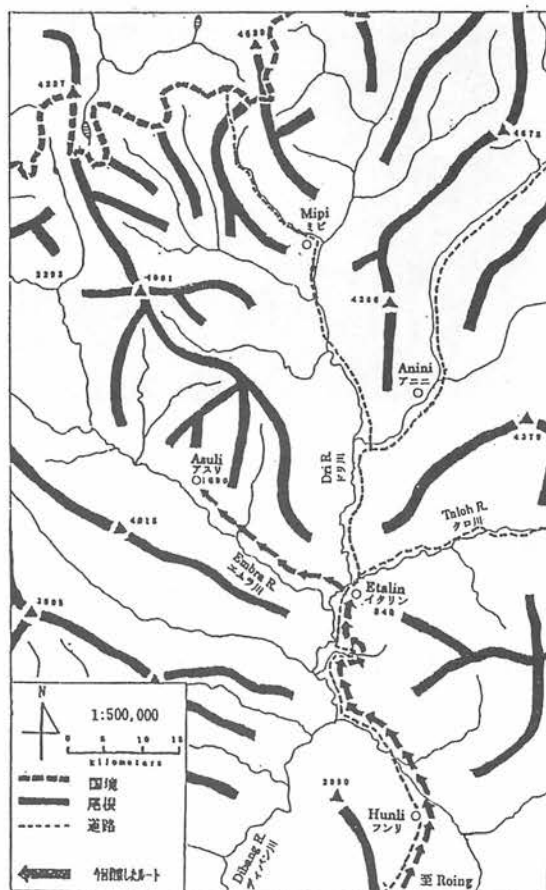
ここで少し、我々が訪れたこのディバン川周辺の探検史について書きたいと思う。恐らく、日本でこの川の事を知っている人は、数える程しかないであろう。しかし、隣のディハン川、すなわちツァンポー川の探検史は、非常に有名である。

かつて、チベットを東へ向かって流れるツァンポー川が、最終的にどこに流れ込むのか、地理学者達にとって、大きな謎であった。そして、当時インドを植民地としていたイギリスが中心となって、調査が繰り返されたが、厳しい自然環境と、ミシュミヤアボール（Abor）といった原住民達の妨害などによりなかなか進展は見られなかった。詳しくは書かないが、18世紀にこの謎が議論されるようになり、1878年にネム・シンというラマ僧によって、ギャラ・ペリ（7,150m）と、ナムチャ・バルワ（7,762m）という高峰を擁する大屈曲部が発見された。そして、1913年に、イギリス人のF.M.ベイリー（F.M.Bailey）と、C.H.モーズヘッド（C.H.Morshead）が、アッサムからチベットに入り、ツァンポー川とディハン川が同一河川であることを証明した訳だが、その際、ベイリー達がチベットへ入る為のアプローチとして利用したのが、このディバン川である。彼等は1911年のイギリスによるアボール族討伐隊の測量班に同行するという形で、イタリアン村の上流でタロ川から分岐するドリ（Dri）川の上流にある、ミピ（Mipi）という村に滞在し、やがて軍から離れて国境を越え、チベットへ入った。我々が目指したエムラ川については、ミピに住むチベット人と、エムラ川沿いに住むミシュミ族との間で、物々交換による取引や対立などがあったという記述があるのみである。このベイリー達の探検以外に、外国人がディバン川を訪れたという記録は、今のところ入手できていない。

■歩き始める

さて、いよいよ、自らの足でエムラ川を訪れる事になったわけだが、適行や撮影用の装備や食料等を持っていたので、ポーターを雇うことにした。ポーターは3名で、いずれもミシュミ族である。

▼ディバン川流域概念図



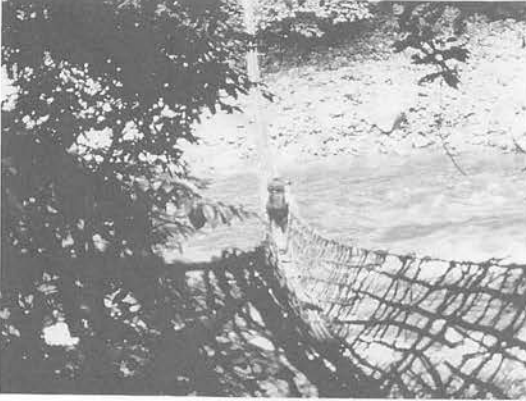
他にもう一人、英語が話せるミシュミ族の男がついてきてくれた。

歩き始めてすぐ、目の前に巨大な釣り橋が現れた。まずはこの橋を渡って、タロ川を越えなければならない。

橋は長さ100m位。川底までは50m程だろうか。2本の太いワイヤーが岸から岸へわたしてあり、それに竹や針金を編みこんで作ってある。一度に一人か二人しか渡ることはできない。足場は竹でできているので、非常に頼りない。しかも中程になると風で非常に揺れる。空身でも厄介だが、さらに大きなザックを背負っているのも、かなり緊張した。この川沿いの最奥の村へ行くまでに、合計7本、往復14回このような橋を渡った。奥へ行くほど橋は御粗末な物になる。私は一度足場を踏み抜いて冷や汗をかいた。

橋を渡り、再び歩き始めた。道は日本の登山道より少し悪い程度だが、非常に高低差が激しい。

▼吊り橋を渡る



インドに来てからおよそ一ヶ月ということもあり、運動不足と疲労、そして照りつける強い陽射しで、私はすぐにバテてしまった。

■ミシュミの世界

歩いていると、突然森がひらけ、急な斜面に畑が広がっていた。この地に住むミシュミ族の焼畑である。彼等は畑作や狩猟をして、ほぼ自給自足の生活をしている。

やがて、この川沿いで最初の村である、イラリ (Erالي) に着いた。我々はガンブラと呼ばれる村の村長の様な地位の人の家に泊めてもらえる事になった。あいにく主人は不在で、3人の子供と3人の奥さんが迎えてくれた。ミシュミ族は一夫多妻である。

ミシュミ族の家は、竹造りのいわゆるロングハウスで、我々が泊めてもらった家は、幅は5m程だが、奥行きは30m位ある。中には4つ部屋があり、何家族も住めるようになっている。入り口から入るとまず大きな部屋があり、壁には、狩りで獲った鹿や猿等の骨や、ミトゥンという生き物の巨大な頭蓋骨が、壁一面に飾られている。この骨の数が、その家の豊かさの水準を表しているようだ。

ミトゥンというのは、半野性の水牛のような生き物で、ミシュミ族は塩を舂めさせて彼等を飼いならし、結婚するときや新しい家を建てる時などに、ミトゥンの首を切り落とし、その肉を村人達に振舞って協力を仰ぐのだそうだ。普段は農耕に使うわけでもなく、乳も出ず、肉もあまりおいしくはないそうだ。

部屋にはいろいろがあり、薪には竹を割って使用

している。生活の道具もほとんどが竹でできている。床は高床式で、床下には鶏や豚などの家畜を飼っている。彼等の現金収入は、この家畜を町へ売りに行くか、道路工事などの肉体労働をしに町へ出るしかない。こうして稼いだ金で、彼等は塩などの生活必需品を買ったり、子供をイタリンの学校へ行かせたりしている。しかし、稼ぎはたかが知れている為、学校をきちんと卒業できる人はほとんどいないようだ。彼等にはかつて首狩りをする慣習があったが、今はそんな野蛮なことはしないといていた。もっと詳しく聞きたかったが、そのためには彼等と接する事が出来る時間が少なすぎた。次に行くときはもう少し立ち入ったところまで話が出来ればと考えている。ミシュミ族には3つの部族に分かれており、この辺りに住んでいるミシュミ族は、イドゥ (Idu)・ミシュミという部族だそうだ。

■試登

次の日、一日かけてアティリ (Atili) 村まで移動し、翌日、村のそばにある、エムラ川の支流のアニョ (Anyo) 沢を試登してみることにした。隊員4人のうち2人を村に残し、現地の若者2人を連れていった。

沢に入ると、小滝や釜などもあり、まるで日本の奥多摩のような感じだった。途中7m位の滝が幾つかあったが、脇から簡単に越えることができた。この日は天気が良く蒸し暑かったので、久し振りの沢はとても気持ち良かったが、半日で戻る事になっていたのも、最後まで行かずに、途中で引き返した。

■アンブリン へ

翌日、アティリ村を発ち、エムラ川沿いを更に



▲エムラ川流域概念図

奥へと進んだ。半日歩いて、アンブリン (Ambulin) 村に着くと、おばあさんが、炉辺で焼いたトウモロコシでもてなしてくれた。村のガンブラの話によると、10年前までは、この村にはインド軍のキャンプがあり、ヘリポートや病院、サッカーグラウンドがあったそうだが、現在はその話からは想像もつかないほどさっぱりとしていて、昔ながらの生活をしている。

そして、最奥の村から上流にも、かつては道があったそうで、1962年の中印戦争の際、大勢のラマ僧が難民としてその道を下ってきたそうだ。難民達は12年前まで村々に滞在していたが、今はロヒト地区のテジュ (Tezu) というまちの難民収容施設にいるそうだ。現在その道は全く使われておらず、村人がほとんどその道について知らない。古老の話では、最奥の村から10日程度、中国との国境にあるインド軍のキャンプに着くそうだ。

■最奥の村へ

アルナチャルに滞在できる日数も残り少なくなってきたので、翌日、この村に、ほとんどの荷物と通訳のイザキ氏、隊員一名を残し、足の揃った隊員三名と、現地の若者達で、エムラ川沿いの最奥の村、アスリ (Asuli) を目指すことにした。重い荷物が無くなったので、一気に歩くスピードが上がったが、アンブリンを出てからしばらく進むと、道が踏み後程度になり、小雨が降っていたせいか、今度は大量の蛭に悩まされることになった。10分歩くとズボンに20匹位はりついている。煙草の煙で何とかなるような数ではないので、我々は手でむしり取っていたが、現地の若者達は肩からさげている鉈で、剥き出しの足についた蛭を削ぎ落としていた。休憩しているときに、ふと上着をめくと、手の小指の先ぐらいの太さに膨れ上がった蛭が、血みどろの腹にくっついていて。衛生面は心配だったが、たいして痛みがあるわけでも無いので、歩いていくにつれ徐々に蛭には無頓着になっていった。つり橋も更にきわどさを増し、現地の若者達も恐る恐る渡っていた。

やがて、アスリ村の一つ手前のアウリ (Auli) 村に着くと、沢山のミトゥンが迎えてくれた。村といっても家は一軒しかなかった。家の中ではおじさんが一人で竹細工をしていた。アスリ村まで

▼エムラ川上流を臨む



はあと少しという事だった。

午後2時頃、ついに最奥の村、アスリに着いた。ここも家は一軒しかなかった。お爺さんとその息子の家族が暮らしていた。息子は町へ働きに出ているそうで、家にはいなかった。日が暮れる前に、アンブリンのそばのアラリ (Arali) 村まで引き返さねばならなかったので、差し出された酒を一気に飲み干し、あわただしく村を發った。

*アスリ村を出た後は、来た道を引き返すだけなので、割愛させていただくことにする。

おわりに

アルナチャルに関する情報は、日本ではもちろん、デリーやアッサムでも、ほとんど手に入れる事は出来なかった。入域許可等に関しても、デリーで運良く州大臣に会うことが出来なかったら、なかなか上手くいかなかったであろう。やはり、実際に現地へ行って、渉外活動をしなければ話にならないようだ。もっとも、現地に行っても、インドののらりくらりとした社会では、まず思い通りに事が運ぶ事はないであろう。今度、入域許可料等の仕組みが変わるそうだが、世界から国境というものがなくなる限り、やはり今後も、世界でも有数の入域が困難な地域であることに変わりはないであろう。

今回我々は、実際に現地を訪れる事により、他では得られない貴重な情報に全身で触れることが出来た。そして、我々は今後も、この地域で探検の可能性を探っていくつもりである。

(文：大津 広策)

ミレニアム・ミート (2001.2/3~4) 開催

尾形 好雄

新世紀の幕開けを記念してヒマラヤン・クラブ (HC) のミレニアム・ミートが2月3日~4日の2日間にわたりインドのムンバイ (旧ボンベイ) で開催された。

昨秋、ヒマラヤン・ジャーナルの編集長、ハリッシュ・カパディアからこの記念集会のゲスト・スピーカーとして招請を打診された時、これは良い機会とばかりに二つ返事で承諾した。1980年以降毎年のように出かけていたインドだが、このところすっかりご無沙汰しており、たまにはインドの仲間たちと楽しい語りもいいだらうと、久々の訪印となった。

グジュラート州を襲った大地震の直後だっただけに震災の影響が懸念されたが、ムンバイは何の被害も無かったようで、悠久なる流れそのままであった。

ヒマラヤン・クラブ通常総会

ミレニアム・ミートの前日 (2日) に、YMC Aホールの会議室でヒマラヤン・クラブの通常総会が開かれた。総会はDr.M.S.ギル会長を議長に選出して、議事進行された。総会資料を事前に会員に送付していることもあって、議事は企業総会のように短時間で終了した。

その後、インド各地から集まった会員たちから意見を求められ、バンガロールの会員からは、若

いアルパイン・クライマーが少なくなっている現状が報告され、スライド・トークショーなどで啓蒙を図りたいので、講師を派遣して貰いたいとの要望が出されていた。

総会の記念講演は、「My Kind of Darjeeling and Sikkim」と題してハリッシュ・カパディアが素晴らしいスライドをまじえて、ヒル・ステーションで名高いダーズリンの現況や知られざるノース・シッキムの山々などを紹介した。

尚、総会に先立ちナワン・ゴンブ、ジョン・ジャクソン、尾形好雄、ドルジェ・ラトーの4名がHCの新しい名誉会員に推挙された。現在の名誉会員は32名 (内日本人は稲田定重、松田雄一、大塚博美氏と尾形の4名)。

ミレニアム・ミート

3日 (土) からの記念集会はムンバイの中心地にあるチャバン・オーデトリウムムのホールで開かれ、HCのDr.M.S.ギル会長をはじめ多くのHC会員の外、クルト・ディンベルガー (オーストリア)、ビル・エイトケン (イギリス)、尾形好雄 (日本)、モト・チュワン、クンジ・トリベディ、現存する「タイガー・シェルパ」のアン・ツェリン (96歳)、ナワン・ゴンブ (66歳)、トブゲイ・シェルパ (67歳) (以上インド) などの招待者を迎えて盛大な集会だった。

初日の会議はマハラシュトラ州知事のプレゼンテーションで始まり、州知事から3人のタイガー・シェルパに記念品が贈呈された。また、今回のために編纂されたヒマラヤン・ジャーナルの記念特別号「A Passeege to Himalaya」が編著のハリッシュ・カパディアから州知事にプレゼントされた。それにしてもインドではこのような集會に州知事が臨席されるのだから驚かされる。

州知事退席の後、クルト・ディンベルガーが翌日のプレ・トークとして彼の幅広いアウトドア・ライフを素晴らしいスライドをまじえて紹介した。



▲ギル会長(左)、州知事と3人のタイガー・シェルパ

▼講演（クルト・ディンベルガー）



次いでヒマラヤ各地を縦横無尽に彷徨し、多くの書物を記しているヒマラヤン・トラベラー、ビル・エイトケンがヒマラヤへのアプローチの側面や旅行の楽しみ方についていろんな角度からユーモアたっぷりに講演した。

最後はクンジ・トリベティが迫力あるパノラマ・スライドの大型映像でカイラス、マナサロワール、チョモランマなどを紹介し、初日のメニューを終えた。

翌4日は、先ずクルト・ディンベルガーが“エンドレス・ノット”の映画を上映（60分）。1986年夏13名もの尊い命を奪ったK2の悲劇をドラマチックに伝えるこの映画は、来場者に深い感動を与え涙を誘った。昨年日本でこの「K2嵐の夏」が邦訳されたが、この映画も一緒に紹介されたら、と惜しまれた。

ティー・ブレイクの後、尾形が“ヒマラヤの高峰”と題してヒマラヤ各地の珍しい山々をスライドで紹介した。インドでは中国領ヒマラヤの情報が少ないせいか中国の山々に関心が高かった。

昼食後は、モト・チュワンがインド・ヒマラヤの商業主義登山・トレッキング隊の組織についてスピーチ。その後、1999年に自らリーダーとして参加し、初登頂に成功した難峰ギャ（6794m）の登山報告があり、映像は1996年インド隊のギャ遠征のビデオが上映（40分）された。

2日間の会議の締めくくりはクルト・ディンベルガーが三度登場してヘルマン・ブルとのブロード・ピーク初登頂からシャクスガム行までの自分の“ヒマラヤン・オディッセイ”をスライドで紹介した。このスピーチの中でもK2の悲劇に触れ、

▼講演（尾形好雄）



国際色豊かなベースキャンプで各隊と仲良く交流を図るのは結構なことだが、高所では仲良しこよしは通じないと述べ、ファイナル・ステージで韓国隊とオーストリア隊の取り決めがどうだったのか、と疑問を呈した。

最後にDr.M.S.ギル会長がまとめて2日間にわたった「ミレニアウム・ミート」を終了した。会場のホール（約400席）は連日満員で、毎度のことながらヒマラヤへ想いを馳せるインド人が多いのには感心させられる。今回の催しは全てHC会員のボランティアで運営されており、ホスピタリティーな受け入れ、運営は素晴らしい。

ヒマラヤン・クラブ

創立72周年を迎えたヒマラヤン・クラブ（HC）は、「カンチェンジュンガー一周」などで知られるヒマラヤ開拓者の一人、D・フレッシュフィールドが構想し、K・メイスンとG・L・コールベットが世界中の登山家に呼びかけた。その結果127人の発起人が集まり、1928年2月17日にデリーのインド陸軍総司令官・ウィリアム・バードウッド（初代会長に就任）の部屋で創設された。現在会員数は世界中に約1000人。ヒマラヤン・ジャーナ



▼中央上がタイガー・バッヂ



ルは同クラブの機関紙で1号(1928年)~55号(2000年)まで発刊されている。

タイガー・バッヂ

ヒマラヤン・クラブ(HC)はヒマラヤ登山で顕著な働きをしたシェルパに対して“タイガー・バッヂ”を贈呈する歴史的な役割を担ってきた。

シェルパを公式にHCに登録し、記録を整理し始めたのはHCが創立された。1928年からで、これを行ったのがHCのダージリン支部長、H・W・トビンと云われる。

「虎のメダル」が最初に授与されたのは1939年でテンジン・ノルゲイら14名が授章。以後、65年までに合計65名が授章している。(H J 1966)

現存する“タイガー・シェルパ”は以下の3人だけ。

〔アン・ツェリン〕

1904年、ネパールはソロ・クーンブのターメ生まれ。初遠征はマロリーとアーヴィンが遭難した1924年の英国のエベレスト隊。29,30,31年カンチ、34年のドイツのナンガパルバット隊にも参加し、



▲ハリシュ・カバディア(前列右端)を囲んで

▼アン・ツェリとメダル



ヒットラーからレッド・クロス章を授与されている。日本隊は1962年のビッグホワイト・ピーク隊に参加。最後の登山隊は70年のアビ・ガミン(ボンベイ・チーム)で、実に46年間もの長きにわたってヒマラヤで活躍。No.36のタイガー・バッヂを持つ。(編注: No.36はHC登録番号)

〔ナワン・ゴンブ〕

1935年生まれ。エベレストに二度登った最初のシェルパとして現在ではインドで最も名声の高いシェルパ。アルパイン・クラブ、ヒマラヤン・クラブの名誉会員。

〔トブゲィ・シェルパ〕

1934年生まれ。ヒマラヤン登山学校(ダージリン)、ネルー登山学校(ウツタルカシ)のインストラクターとして多くの登山者を養成。インド登山界では“グルー”と称されている。日本隊は1954年のマナスル隊、1961年のランタン・リルン隊に参加。

戦前のタイガー・バッヂ授章者17名

1939,5,30	Lewa	46	Everest1938
	Pasang Kikuli	8	
※氏名の右	Kusang Namgir	9	
の数字はヒ	Ang Tharkay	19	Everest1938
マラヤンク	Wangdi Norbu	25	
ラブ登録番	Lakpa Tenzing	30	Everest1938
号	Renzing	32	
	Tenzing Norgay	48	Everest1939
※HJ1966	Dawa Thondup	49	K 2 1939
	Dawa Tsering	53	
	Palden	54	
	Pasang Dawa Lama	139	
	Lobsang	144	
	Ang Tenzing	3	
1940,4,30	Ang Tsering	51	
	Aila	61	
	Gender	91	

地域ニュース

《ネパール》

ツムリントールにホテル開業

H A J 会員の文蔵照雄氏が、マカルーへの出発点でもあるツムリントールに「MAKALU RESORT」と云うホテルを開業した。ツムリントール飛行場から徒歩3分。通年営業で、1泊2食20\$。ベット、水洗有りで収容約40名。連絡先は
E-mail:makalu@mail.com.np



トピックス

「出入国カード」廃止へ

法務省は、空港などから外国へ出かける際、入国審査官に提出することが義務付けられているE Dカード（出入国記録カード）を、本年7月までに廃止する方針を固めた。（2001.3.17 読売新聞）

■財政支援：加藤孝子、長谷川和雄（各1万円）

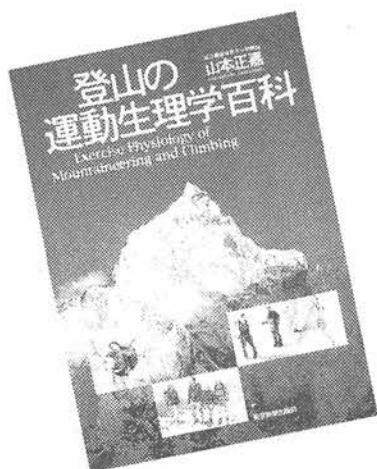
東京集会のお知らせ

日 時 4月23日（月）午後7時～
内 容 現地名の日本語表記について
談論風発を!!
場 所 H A J ルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

「身体の仕組みを知って、安全登山を!!」

登山の運動生理学百科

山本正嘉 著（国立鹿屋体育大学助教授）



「登山で疲れる原因は何か」「中高年や女性登山者でも快適に登るためには?」「適切なトレーニングABC」「あなたにもできる高所登山」など登山全般を網羅。

初級者からベテランまで幅広い登山者を対象に、登山と健康、疲労、中高年者・女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的データをもとに解説。著者は、ヒマラヤをはじめとする高所登山家であると同時に、スポーツ生理学の専門家。

●A5判・並製 ●価格：本体2000円＋税

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎03-3740-2674(直) FAX03-3458-0689

〔20世紀・日本ヒマラヤ登山のまとめ1〕

八千メートル峰登頂者生年月日別リスト

20世紀に花開いた「ヒマラヤ登山」であるが、世界の人口の過密化と高齢化に比例するが如くに、登山の様相も急激に変化してきた。

しかしながら、どのような態様であろうとも、行為の結果であることを整理しておくことも、文化としての登山の大切な一面であろう。

マナスル時代から約半世紀を経た現在、八千メートル峰の実質登頂者は356人。内女性は27人である。この数字を多いととらえるか、少ないと考えるかは立場によって分かれるだろう。

この356人を生年月日に見ると、1914年生れの今西寿雄から1977年生れの田島崇行まで63年間に分布している。1940年代まで生まれが99人(27.8%)、50年代117人(32.9%)、60年代108人(30.3%) 70年代32人(9%)となっている。

また、我が国の八千メートル峰登頂者の推移を見ると、1956年マナスル登頂以降の20年間で20名であったものが、77年から79年の3年間で20名となり81年には、遂に1年間で20名の登頂者が出現するに至った。

1990年代にはいるとすぐに「60歳台」の登頂者が出現し、その流れは現在では「高所遠足」型としてすっかり定着している。このままでいけば数年後には「70歳台」の八千メートル登頂者が出現するだろう。

オーバーユーズの問題とも絡めて、21世紀の八千メートル「登山」の行く末を見守りたい。(山森欣一)
(氏名の前の×印は死亡者/年齢は登頂時/備考のⅡは八千m峰通算登頂回数/A Pはアルパイン・スタイル

(2000年12月31日現在・山森欣一調べ)

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
001	1914, 9	× 今西 寿雄	マナスル(1956)	41	初登頂・病死
002	1920, 11	× 加藤喜一郎	マナスル(1956)	35	病死
003	1929, 9	斎藤 惇生	シシャパンマC(1990)	60	初の60歳台の登頂
1910年代～20年代=合計 3人 [内女性0] 死亡=2人 [内女性0]					
004	1930, 6	日下田 実	マナスル(1956)	25	
005	9	中島 道郎	シシャパンマC(1990)	59	
006	1934, 2	松浦 輝夫	サガルマータ(1970)	36	日本人初登頂
007	12	平林 克敏	サガルマータ(1970)	35	
008	1935, 2	平田 恒雄	チョー・オユー(2000)	65	日本人八千m峰最高齢
009	4	× 原田 達也	シシャパンマC(1995)	60	1997,8,20 スキルブルムで雪崩死亡
010	10	荒山 孝郎	チョー・オユー(1999)	63	
011	11	桑原 巖	シシャパンマC(1994)	58	
012	1936, 5	青木 正次	チョー・オユー(2000)	63	
013	7	山本 俊雄	チョー・オユー(1995)	59	
014	8	原 真	シシャパンマC(1982)	46	A P
015	11	石川 富康	チョー・オユー(1992)	54	VI
016	1937, 1	田中 元	マカルー(1970)	33	日本人初登頂・南東稜初登攀
017	1	奥 克彦	シシャパンマC(1999)	62	
018	12	f 中世古直子	マナスル(1974)	36	世界女性初の八千m峰登頂
019	1938, 5	鈴木 孝雄	チョー・オユー(1992)	52	Ⅱ
020	8	阿久津悦夫	サガルマータ(1985)	47	帰路ビバーク

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
021	1938,11	× 小西 政継	ダウラギリ I (1994)	55	1996,10,1 マナスルで行方不明 III
022	11	f 渡邊 玉枝	チョー・オユー(1992)	52	III
023	11	池田 錦重	チョー・オユー(1992)	52	II
024	1939, 1	尾崎 祐一	マカルー(1970)	31	日本人初登頂・南東稜初登頂
025	1	谷口 正彦	チョー・オユー(1998)	59	
026	4	今野 一也	チョモランマ(2000)	61	
027	4	酒井 國光	ブロード・ピークM(1988)	49	
028	8,	三渡 忠臣	チョー・オユー(2000)	60	
029	9,	f 田部井淳子	サガルマータ(1975)	35	世界女性初登頂 III
030	10	森山 勇	ガッシャーブルム II (1998)	58	
031	11	川田 哲二	ダウラギリ I (1970)	30	日本人初登頂
032	12	× 根津 皖一	チョー・オユー(1992)	51	1998,11,15 巻磯山で遭難 III
1930年代=合計 29人 [内女性3] 死亡=3人 [内女性0]					
033	1940, 4	小原 和晴	マナスル(1971)	31	西稜初登攀
034	5	× 日野 悦郎	チョー・オユー(1986)	46	1994,2,3 病死 III ネパールから越境
035	11	川原 慶紀	シシャバンマC(1994)	53	II
036	1941, 1	f 内田 昌子	マナスル(1974)	33	世界女性初の八千m峰登頂
037	2	× 植村 直己	サガルマータ(1970)	29	日本人初登頂 1984,2,13 マッキンリーで行方不明
038	5	f 森 美枝子	マナスル(1974)	32	世界女性初の八千m峰登頂
039	11	近藤 和美	チョー・オユー(1992)	50	VI
040	1942, 2	f 高橋 通子	チョー・オユー(1987)	45	
041	4	田村 正勝	ブロード・ピークM(1993)	51	
042	5	中村 省爾	K 2 (1977)	35	日本人初登頂 II
043	8	高塚 武由	K 2 (1977)	34	日本人初登頂
044	11	深田 良一	カンチェンジュンガM(1980)	37	日本人初登頂 北壁初登攀 無酸素登頂
045	1943, 1	高橋 和之	ローツェ(1983)	40	II
046	2	畠山 正昭	チョー・オユー(1995)	52	
047	3	× 廣島 三朗	K 2 (1977)	34	1997,8,20 スキルブルム 雪崩で死亡
048	4	重野太肚二	ダウラギリ I (1978)	35	南稜初登攀 II
049	10	小野寺正英	K 2 (1977)	33	
050	1944, 5	f 大神田伊曾美	チョー・オユー(1999)	55	
051	7	× 坂野 俊孝	カンチェンジュンガM(1980)	35	北壁無酸素登頂 1982,8,31 チョゴリで死亡
052	8	f 倉井 登代	チョー・オユー(1996)	52	
053	1945, 5	× 高見 和成	チョゴリ(1982)	37	北稜無酸素登頂 1998,2,22 大山滑落死亡
1940年代前半=合計 21人 [内女性5] 死亡=5人 [内女性0]					
『戦前・戦中生まれ合計53人 [内女性8] 死亡10人 [内女性0]					
054	1945, 9	石黒 久	サガルマータ(1973)	28	秋期初登頂
055	9	千葉 孝義	シシャバンマC(1982)	37	A P
056	10	清水 清二	ダウラギリ I (1978)	32	南稜登頂
057	10	金沢 健	チョー・オユー(1992)	46	
058	1946, 1	飛田 和夫	ヤルン・カン(1981)	35	日本人初登頂

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
059	1946, 1	中村 進	チョモランマ(1988)	42	頂上からテレビカメラ撮影
060	8	安村 淳	シシャパンマC(1999)	53	
061	10	池田 壮彦	シシャパンマC(1994)	47	II
062	11	成崎 公生	ダウラギリ I (1995)	48	
063	11	八木原罔明	ヤルン・カン(1981)	34	日本人初登頂 III
064	1947, 2	坂下 直枝	カンチェンジュンガM(1980)	33	日本人初登頂 北壁初登攀 無酸素登頂
065	4	大谷 映芳	K 2 (1981)	34	II
066	4	影山 淳	マナスル(1976)	29	西稜初登攀 II
067	6	辻 美行	ブロード・ピークM(1977)	30	
068	6	× 早坂敬二郎	ブロード・ピークM(91)	44	日本人初登頂 II
069	10	重廣 恒夫	K 2 (1977)	29	1992,3,22 大天井岳で雪崩死亡
070	11	宮崎 勉	ダウラギリ I (1978)	30	日本人初登頂 V
071	12	島方 健次	ブロード・ピークM(1988)	40	南東稜初登攀 V
072	12	斉藤 勤	ダウラギリ I (1998)	50	
073	12	田中 成三	アンナプルナ I (1979)	31	日本人初登頂
074	12	川村 晴一	カンチェンジュンガM(1980)	32	日本人初登頂 北壁初登攀 無酸素登頂 III
075	1948, 2	保坂 昭憲	カンチェンジュンガM(1981)	33	II
076	5	馬場 博行	チョー・オユー(1992)	44	
077	7	尾形 好雄	ヤルン・カン(1981)	32	日本人初登頂 V
078	7	× 宇部 明	ダウラギリ I (1978)	30	南東稜初登攀 1980,5,2 チョモランマで雪崩死亡
079	7	田中 基喜	マナスル(1971)	22	西稜初登攀
080	8	湯田 一男	マカルー(1982)	34	無酸素登頂
081	11	松本 正城	ガッシャーブルム II (1985)	36	
082	12	谷口 守	ナンガ・バルバット(1983)	34	日本人初登頂 IV
083	12	× 小林 利明	ダウラギリ I (1978)	29	南稜初登攀 1982,12,28 サガルマータで行方不明
084	1949, 1	山下 健夫	チョモランマ(2000)	51	
085	1	賀集 信	ブロード・ピークM(1985)	36	II
086	2	f 真嶋 花子	チョー・オユー(1996)	47	
087	2	東 英樹	ガッシャーブルム I (1981)	32	日本人初登頂
088	2	× f 難波 康子	サガルマータ(1986)	47	帰路死亡
089	3	× 加藤 保男	サガルマータ(1973)	23	秋期初登頂 1982,12,28 サガルマータで行方不明 IV
090	3	× 加藤 康二	ダウラギリ I (1978)	29	南稜登頂 アンナプルナ I で行方不明
091	4	大宮 求	カンチェンジュンガM(1980)	31	北壁登頂 無酸素登頂 II
092	4	× f 北川みはる	ガッシャーブルム II (1988)	38	1995,1,1 穂高岳雪崩死亡
093	9	馬場 保男	ガッシャーブルム II (1997)	48	
094	9	荒木富美雄	チョー・オユー(2000)	50	
095	10	和田 城志	カンチェンジュンガS(1984)	34	日本人初登頂 IV
096	10	× 俵谷 久義	ダウラギリ I (1995)	45	帰路行方不明
097	11	下鳥 康三	ガッシャーブルム I (1981)	31	日本人初登頂
098	11	佐藤 英雄	ガッシャーブルム II (1980)	30	日本人初登頂
099	12	山本 秀夫	K 2 (1977)	27	II

1940年代後半=合計 46人〔内女性3人〕 死亡8人〔内女性2人〕

1940年代合計67人〔内女性8人〕 死亡13人〔内女性2人〕

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
100	1950, 1	宮崎 豊文	シシヤパンマC(1992)	42	
101	2	× 吉野 寛	ダウラギリ I (1978)	28	南稜登頂 1983,10,8 サガルマータで死亡 III
102	2	× 山田 昇	ダウラギリ I (1978)	28	南稜登頂 1989,2,24 マッキンリーで死亡 XII
103	3	× 藤倉 和美	カンチェンジュンガM(1981)	31	1981,9,28 ナンダカートで行方不明
104	3	八嶋 寛	ヤルン・カン(1981)	31	日本人初登頂 II
105	3	八幡 敏正	ブロード・ピークM(1991)	41	
106	5	松林 公蔵	シシヤパンマC(1990)	39	
107	7	佐藤 信二	チャー・オユー(1996)	45	
108	9	松井 公治	ナンガ・バルバット(1987)	36	
109	9	関谷 正一	ダウラギリ I (1993)	43	
110	9	小野寺 斉	チョモランマ(1998)	47	
111	10	f 柳沢 伸子	ガッシャーブルムII(1988)	37	
112	10	松沢 哲郎	シシヤパンマC(1990)	39	
113	10	福島 正明	ガッシャーブルムII(1980)	29	日本人初登頂 II
114	12	瀬戸 嗣郎	シシヤパンマC(1990)	39	
115	12	伊藤 清春	チャー・オユー(1995)	44	
116	1951, 2	大蔵 喜福	チャー・オユー(1987)	36	
117	3	佐々木正人	ブロード・ピークM(1988)	37	
118	3	貫田 宗男	チョモランマ(1991)	40	III
119	8	野呂 和久	ブロード・ピークM(1977)	25	日本人初登頂
120	9	林 孝治	シシヤパンマC(1994)	42	II
121	10	× 禿 博信	ダウラギリ I (1981)	29	単独・AP 1983,10,8 サガルマータで死亡
122	10	滝根 正幹	K 2 (1997)	45	西壁上部初登頂
123	11	岡林 良一	ナンガ・バルバット(1987)	35	
124	12	西堤 理一	ブロード・ピークM(1985)	33	
125	12	× 二上 純一	チョモランマ(1991)	39	帰路行方不明
126	1952, 1	斎藤 敏明	チャー・オユー(1996)	44	
127	1	谷 弘行	ダウラギリ I (1978)	26	南東稜初登攀
128	3	出水 明	シシヤパンマC(1990)	38	
129	3	江崎 幸一	チョモランマ(2000)	48	
130	6	田中 淳一	ダウラギリ I (1982)	30	
131	7	× 石橋 真	マカルー(1982)	30	無酸素登頂 1985,5,4 アマダブラムで滑落死亡
132	9	尾崎 隆	ブロード・ピークM(1977)	24	日本人初登頂 VI
133	9	× 角田 不二	ヤルン・カン(1981)	28	日本人初登頂 1984,7,上旬 ナンガ・バルバットで行方不明
134	10	f 橋本しをり	ガッシャーブルムII(1988)	35	
135	10	橋本 久	チョモランマ(1998)	45	
136	11	矢野 利明	チョモランマ(1998)	45	
137	11	小笠原岩雄	ブロード・ピークM(1991)	38	II
138	11	八橋 秀樹	チャー・オユー(1992)	39	
139	1953, 1	吉田 憲司	K 2 (1985)	32	
140	1	× 斎藤 安平	ダウラギリ I (1982)	29	北西稜初登攀 1987,12,20 アンナプルナIで行方不明 III

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
141	1953, 1	鈴木 繁	ローツェ(1983)	30	
142	2	平田 和男	シシヤパンマC(1990)	37	
143	2	鈴木 昇巳	カンチェンジュンガM(1980)	27	日本人初登頂 北壁初登攀 無酸素登頂 II
144	5	吉田 秀樹	ブロード・ピークM(1997)	44	
145	9	佐藤 賢	チョモランマ(1998)	44	
146	11	榊原 義夫	ナンガ・パルパット(1997)	43	
147	1954, 1	上野 幸人	ダウラギリ I (1994)	40	II
148	1	磯野 剛太	カンチェンジュンガC	30	日本人初登頂
149	3	榊原 雅晴	シシヤパンマC(1990)	36	
150	3	長岡 健一	ローツェ(1997)	43	
151	4	片岡 邦夫	カンチェンジュンガM(1981)	27	
152	4	牧野総治郎	チョー・オユー(2000)	46	
153	5	山崎 幸二	チョモランマ(1995)	41	
154	5	駒宮 博男	シシヤパンマC(1982)	28	A P
155	5	× 小松 幸三	ダウラギリ I (1982)	28	北西稜初登攀 1989,2,24 マッキンリーで死亡
156	9	小林 重一	チョモランマ(2000)	45	
157	10	阿部 正巳	ブロード・ピークM(1991)	36	
158	11	名塚 秀二	サガルマータ(1985)	30	IX
159	1955, 1	鈴木 茂	ダウラギリ I (1978)	23	南東稜登頂 II
160	2	× 柳沢 幸弘	アンナプルナ I (1981)	26	南壁初登攀 1982,8,15 チョゴリで死亡 II
161	3	村上 和也	ローツェ(1983)	28	日本人初登頂 III
162	5	菊池 守	ナンガ・パルパット(1985)	30	II
163	6	f 東條真百合	ガッシャーブルムII(1988)	33	旧姓・安原 II
164	6	× 二俣 勇司	マカルー(1991)	36	1992,10,2 クラウンで雪崩行方不明
165	8	田中 敏雄	チョー・オユー(1995)	40	II
166	9	× 杉山 洋隆	チョモランマ(1995)	40	1999,8,10 バトゥラ I で雪崩行方不明
167	10	f 吉田 文江	ガッシャーブルムII(1988)	32	旧姓・木村 IV
168	11	小泉 章夫	ダウラギリ I (1982)	26	冬期初登頂
169	1956, 2	木本 哲	サガルマータ(1985)	25	II
170	3	f 松元 サチ	ブロード・ピークM(1988)	32	
171	3	f 山野井妙子	ブロード・ピークM(1991)	35	旧姓・長尾 IV
172	3	藤原 拓夫	ガッシャーブルムII(1997)	41	
173	5	村口 徳行	チョモランマ(1998)	41	II
174	6	大林 一成	ガッシャーブルムII(1993)	37	
175	6	富田 雅昭	マナスル(1981)	25	II
176	7	早川 晃生	チョー・オユー(1987)	31	
177	8	児玉 隆司	チョモランマ(2000)	43	
178	8	× 香川 毅	ローツェ(1983)	27	南米で行方不明
179	10	高橋 哲也	シシヤパンマC(1991)	35	
180	10	小林 新二	チョー・オユー(1987)	30	
181	11	伊藤 克美	シシヤパンマC(1999)	42	

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
182	1957,12	児玉 誠一	シシヤパンマC(1991)	34	
183	2	坂井 広志	ナンガ・パルバット(1995)	38	北面初登攀
184	2	鈴木 清彦	シシヤパンマC(1989)	32	II
185	2	道脇 幸博	マカルー(1982)	25	無酸素登頂
186	2	遠藤 晴行	サガルマータ(1983)	26	無酸素登頂 IV
187	4	永田 竜	シシヤパンマC(1990)	33	
188	4	f 山口 晶代	チャー・オユー(1996)	39	
189	6	梁瀬 佐一	ブロード・ピークM(1997)	40	
190	6	岡田 勇孝	マカルー(1991)	34	
191	9	加藤 洋	チャー・オユー(1990)	32	
192	10	山本 正嘉	チャー・オユー(1995)	37	
193	10	× 三枝 照雄	サガルマータ(1985)	28	1989,2,4 マッキンリーで死亡 V
194	12	永田 幸一	チョモランマ(1998)	40	
195	1958, 1	青田 浩	アンナプルナ I(1981)	23	南壁初登攀
196	1	塚本 茂登	チャー・オユー(1992)	34	
197	2	外山 哲也	ブロード・ピークM(1985)	27	
198	3	中西 紀夫	ナンガ・パルバット(1983)	25	日本人初登頂 II
199	3	三谷統一郎	ダウラギリ I(1982)	24	VII
200	4	清水 修	ガッシャーブルム I(1986)	28	北面初登攀 II
201	6	倉嶋 博之	ガッシャーブルム I(1997)	39	
202	7	富永 浩三	シシヤパンマC(1990)	31	
203	8	北村 貢	チャー・オユー(1985)	27	日本人初登頂・ネパールから越境
204	8	佐伯 成司	ガッシャーブルム I(1994)	35	
205	8	高橋 堅	ガッシャーブルム II(1985)	26	
206	12	和久津 清	ガッシャーブルム I(1986)	27	北面初登攀
207	1959, 4	今村 裕隆	チョゴリ(1990)	31	北西壁下部初登攀 III
208	4	今田 賢次	ガッシャーブルム II(1980)	21	日本人初登頂
209	6	三樹 昇	チャー・オユー(1996)	35	
210	8	f 坪佐 圭子	チャー・オユー(1997)	38	
211	9	小塚 和彦	チョモランマ(1999)	39	
212	9	大谷 亮	カンチェンジュンガC(1984)	24	日本人初登頂
213	10	内山 栄	ブロード・ピークM(1997)	37	旧姓・岩崎
214	10	坂本 正治	ローツェ(1997)	37	II
215	12	橋谷田弘仲	チャー・オユー(1995)	35	
216	12	山本 宗彦	ブロード・ピークM(1985)	25	III
1950年代=合計117人〔内女性8人〕 死亡=14人〔内女性0人〕					
217	1960, 2	岩崎 洋	ブロード・ピークM(1997)	37	
218	2	倉橋 秀都	シシヤパンマC(1994)	34	IV
219	2	望月 泰彦	ナンガ・パルバット(1993)	33	
220	3	片山 貴寛	ガッシャーブルム I(1990)	30	
221	3	花田 博志	ナンガ・パルバット(1985)	25	II

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
222	1960, 5	加藤 智二	ガッシャーブルムⅡ(1985)	25	Ⅱ
223	6	高村 真司	シシャパンマC(1989)	28	
224	7	小野 岳	マカルー(1995)	34	東稜下部 Ⅱ
225	9	f 池上 由紀	チョー・オユー(1992)	32	旧姓・佐藤
226	11	柳原 武彦	チョー・オユー(1992)	31	
227	1961, 1	田辺 治	ガッシャーブルムⅡ(1990)	29	Ⅵ
228	2	古野 淳	チョモランマ(1995)	34	北東稜初登攀
229	3	古関 正雄	ダウラギリⅠ(1993)	32	
230	4	江塚 進介	ブロード・ピークM(1993)	32	V
231	4	佐藤 光由	サガルマータ(1985)	24	Ⅲ
232	5	安川 誠二	チョー・オユー(1996)	35	
233	7	吉村 哲明	ブロード・ピークM(1991)	29	
234	8	増田 徹	チョー・オユー(1996)	34	
235	9	青黄 靖	チョー・オユー(2000)	38	
236	10	春木 俊秀	ローツェ(1986)	24	
237	12	戸高 雅史	ナンガ・パルバット(1991)	28	Ⅳ
238	1962, 1	高井 正成	シシャパンマC(1990)	28	
239	1	× f 藤堂多重子	チョー・オユー(1996)	34	2000,2 大雪山で死亡
240	3	中島 明	K 2(1997)	35	西壁上部
241	3	小西 浩文	シシャパンマC(1982)	20	A P Ⅵ
242	3	中山 茂樹	シシャパンマC(1990)	28	
243	4	清野 嘉樹	ナンガ・パルバット(1999)	37	
244	5	池田 憲一	チョー・オユー(1995)	33	
245	5	× 大西 宏	サガルマータ(1989)	27	1991,10,16 ナムチャ・バルワで雪崩死亡
246	6	海野 雅之	カンチェンジュンガM(1988)	26	
247	6	近藤 謙司	チョー・オユー(1987)	25	
248	8	月原 敏博	シシャパンマC(1990)	27	
249	8	北村 俊之	ブロード・ピークC(1995)	32	N~C~M縦走 V
250	9	小田 隆三	カンチェンジュンガM	28	北東支稜
251	10	山本 篤	シシャパンマM(1988)	26	Ⅵ
252	1963, 1	井本 重喜	チョー・オユー(1994)	31	Ⅱ
253	1	棚橋 靖	チョー・オユー(1990)	27	Ⅱ
254	2	笹原 慎司	チョー・オユー(1994)	31	
255	7	阿部 訟二	チョモランマ(1998)	34	
256	7	松本 政英	ブロード・ピークM(2000)	36	
257	8	× 佐藤 正倫	ナンガ・パルバット(1990)	26	1993,10,18 トゥインズでクレバス転落死亡
258	8	沢田石 順	チョー・オユー(1995)	32	
259	10	角田 道弘	チョー・オユー(1997)	33	
260	11	林 雅樹	ガッシャーブルムⅠ(1996)	32	
261	12	山田 良二	K 2(1997)	33	西壁上部
262	1964, 3	小野 奨造	ガッシャーブルムⅡ(1997)	33	

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
263	1964, 3	稲葉 英樹	ガッシャーブルム I (1994)	30	II
264	5	米山 悟	ガッシャーブルム II (1998)	34	
265	5	林本 章	チョー・オユー (1992)	28	
266	5	三村 雅彦	マナスル (1996)	32	
267	7	増永 広樹	チョー・オユー (1996)	31	
268	8	野沢井 歩	ダウラギリ I (1993)	29	
269	10	斉藤 順一	ブロード・ピーク M (1988)	23	
270	10	三野 和哉	ブロード・ピーク M (1993)	28	
271	12	中島 俊弥	ダウラギリ I (1991)	26	II
272	1965, 3	松原 尚之	マカルー (1995)	30	東稜下部初登攀 II
273	3	新野 泰之	ガッシャーブルム II (1997)	32	
274	3	上村 博道	チョモランマ (1998)	33	
275	4	山野井泰史	ブロード・ピーク M (1991)	26	IV
276	5	後藤 文明	チョー・オユー (1993)	28	V
277	6	小林 正巳	K 2 (1997)	32	西壁上部
278	6	松本 伸夫	チョモランマ (2000)	34	
279	6	× 石坂 工	マカルー (1991)	26	帰路死亡
280	7	武田 澄人	ダウラギリ I (1994)	30	
281	7	高島 聡	チョー・オユー (2000)	34	
282	7	f 高橋留智亜	チョモランマ (2000)	35	
283	8	f 高橋 尚子	チョー・オユー (1999)	34	
284	8	原田 暁之	マナスル (1997)	32	
285	9	矢部 幸男	ナンガ・パルバット (1995)	29	北面初登攀
286	10	× 小林 俊之	アンナブルナ I (1987)	22	南壁冬期初登攀 帰路死亡
287	1966, 1	f 遠藤 由加	ナンガ・パルバット (1988)	32	A P IV
288	6	工藤 寛	ダウラギリ I (1998)	33	II
289	7	寺山 元	チョー・オユー (2000)	33	
290	8	鈴木 理裕	チョー・オユー (2000)	31	
291	9	奥田 仁一	カンチェンジュンガ M (1998)	23	北壁・ビバーク
292	9	f 佐藤あずみ	シシャパンマ C (1990)	26	旧姓・白沢
293	12	中村 貴士	ブロード・ピーク M (1993)	27	
294	1967, 1	熱田 渉	サガルマータ (1994)	30	南稜登頂
295	3	広瀬 学	マナスル (1997)	30	
296	3	鈴木 幹夫	K 2 (1997)	23	西壁上部 II
297	5	山根 智之	ガッシャーブルム I (1990)	24	西稜末端
298	5	横山 浩二	ダウラギリ I (1990)	24	
299	6	谷川 太郎	ブロード・ピーク M (1991)	25	VI
300	11	星野 龍史	チョー・オユー (1993)	25	V
301	12	内田 健一	ブロード・ピーク M (1993)	24	
302	12	f 続 素美代	チョー・オユー (1992)	31	III
303	1968, 2	銅谷 実	ローツェ (1999)		

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
304	1968, 2	品川 幸彦	ガッシャーブルム I (1997)	29	II
305	2	寺田 勉	チョー・オユー(1993)	25	
306	2	杉山 敏康	マナスル(1996)	28	
307	4	× 赤坂 謙三	K 2 (1996)	28	1998,5,16 カンチェンジュンガで死亡 II
308	4	星野 秀樹	シシヤパンマ C (1995)	27	
309	7	澤田 実	ダウラギリ I (1995)	27	III
310	10	秋山 武士	ナンガ・パルバット (1995)	26	北面初登攀
311	10	平岡 竜石	ナンガ・パルバット(1997)	28	
312	11	有川 博章	マナスル(1996)	27	
313	11	木村功二郎	ガッシャーブルム I (1997)	28	
314	12	f 大久保由美子	ガッシャーブルム II (1997)	28	
315	1969, 1	藤田 耕史	シシヤパンマ C (1990)	21	
316	2	森 真平	ナンガ・パルバット (1999)	30	
317	3	川奈部隆之	ガッシャーブルム I (1996)	27	
318	4	長久保浩司	ガッシャーブルム II (1993)	24	IV
319	4	前田 勝司	チョー・オユー(1997)	28	
320	6	劔持 典之	シシヤパンマ M (1999)	30	
321	9	中川 邦仁	K 2 (1997)	27	西壁上部初登攀 II
322	10	高橋 玲司	シシヤパンマ C (1999)	29	
323	10	服部 文祥	K 2 (1996)	26	旧姓・村田 南南東稜登頂
324	11	田端 宏好	チョー・オユー(1994)	24	
1960年代=合計 108人〔内女性 8人〕 死亡= 6人〔内女性 1人〕					
325	1970, 1	広瀬 健太	カンチェンジュンガ M (1998)	28	北壁登頂
326	1	服部 徹	ブロード・ピーク C (1995)	25	N~C~M縦走 II
327	3	杉山 敏彦	ダウラギリ I (1998)	28	
328	6	× 椎名 厚史	K 2 (1996)	26	1998,5,16 カンチェンジュンガで死亡
329	6	下間 洋司	ダウラギリ I (1998)	28	
330	8	吉田 裕一	ガッシャーブルム II (1993)	22	III
331	9	諸岡慶太郎	チョー・オユー(1998)	27	
332	9	秋山 剛	チョー・オユー(1993)	23	
333	9	辻 信広	ブロード・ピーク M (1993)	22	
334	1971, 1	竹内 洋岳	マカルー(1995)	24	東稜下部 III
335	1	加藤 博	シシヤパンマ C (1999)	28	
336	3	唐橋 芳和	ガッシャーブルム I (1996)	25	
337	7	宮川 仁一	チョー・オユー(1995)	24	
338	11	荒井 俊彦	マカルー(1995)	23	東稜下部
339	1972, 1	上田 恵爾	ダウラギリ I (1995)	23	
340	5	綿貫 剛	ブロード・ピーク M (1997)	25	
341	5	大谷 篤	ナンガ・パルバット (1997)	25	
342	7	萩尾 雄二	チョー・オユー(1995)	23	II
343	10	× 佐野 崇	K 2 (1996)	23	1998,3,16 鹿島槍で死亡

順位	生年月日	氏名	最初に登頂した山	年齢	備考
344	1972, 11	佐野 友康	ガッシャーブルム I (1997)	21	
345	1973, 2	原田 智紀	チョー・オユー(1994)	21	
346	5	上岡 鋼平	ガッシャーブルム II (1997)	26	
347	8	野口 健	チョー・オユー(1996)	23	II
348	10	高橋 和弘	K 2 (1996)	22	南南東稜登頂 II
349	10	中村 和貞	チョー・オユー(1999)	25	
350	12	福本 誠志	ブロード・ピーク M (1997)	25	II
351	1974, 8	豊嶋 匡明	マナスル(1997)	23	
352	11	重川 英介	チョモランマ(1995)	21	日本人Everest 最年少登頂
353	1975, 2	岩下 頼人	ガッシャーブルム I (1997)	23	
354	7	関 裕一	マナスル(1997)	22	
355	1976, 1	加藤 慶信	マナスル(1997)	21	
356	1977, 2	田島 崇行	ガッシャーブルム II (1997)	20	日本人八千m峰最年少登頂
1970年代=合計 32人〔内女性0人〕 死亡0人〔内女性0人〕					
合計 356人〔内女性27人〕 死亡40〔内女性3人〕					

※本資料作成に当っては松田雄一氏をはじめ各隊の関係者から情報を提供していただいた。

2002年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを探して

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ(夢)を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部(横浜)、95年マカルー東稜下部(JAC)、97年K2西壁上部(JAC東海)など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・オユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央部に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂し

ないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰に登った岳人たちもそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。中央峰の標高が8,000mを切ることも有りえない訳ではないだろう。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的な困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えています。意欲ある岳人の参加を期待します。

記

1. 時期 2002年秋 50~60日間程度
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

■ 寸 感 ■

現地語を日本語で表記する場合、統一基準の知識を持ち合わせていないので「どの表記」によるかを判断できない。勿論多くは英文からの翻訳のケースであろうが本号冒頭の「ARUNACHAL PRADESH」の場合も、アルナチャル・プラディッシュ、アルナチャール・プラデーシュ、アルナチャル・プラデシュ、そしてアルナチャル・プラディッシュである。広島三朗が提案した「カシミール」を「カシュミール」へも未だ実現していない。

(山森)

事務局 日誌 (3月)

- 3日(土) ニンチン・カンサ隊合宿(ルーム)
 4日(日) 都岳連「高所順応研究会」於、代々木(山森)
 9日(金) ヒマラヤ353号発送
 中国登山協会から「費用徴収の金額」一部修正 FAX届く
 10日(土) 「故・吉尾弘一周忌追悼集会」於、

代々木(山森)

- 13日(火) 「江本嘉伸氏の独立を祝う会」、於、市ヶ谷(山森)
 18日(日)～20日(火) ヤンラ・カンリ、ニンチン・カンサ両隊合宿(於、安達太良山、9名)
 26日(月) 東京集会(12名)
 31日(土) ヤンラ・カンリ、ニンチン両隊合宿(於ルーム)

ヒマラヤ No.354 (5月号)

平成13年4月10日印刷 13年5月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

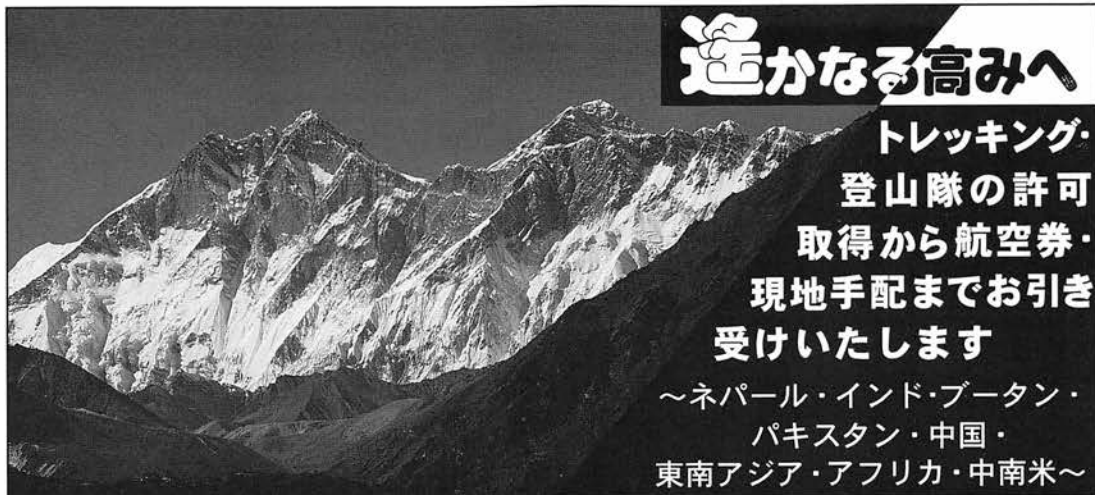


マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



遙かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤルをご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外南部(メイルオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004